

# 祖父の書齋

宮本百合子

青空文庫



向島の堤をおりた黒い門の家に母方の祖母が棲んでいて、小さい頃泊りに行くと、先ず第一に御仏壇にお辞儀をさせられた。それから百花園へ行ったり牛御前うしのごぜんへ行ったりするのだが、時には祖母が、気をつけるんだよ、段々をよく見て、と云って二階へつれてあがった。いつも使っていない二階は不思議な一種の乾いた匂いが漂っていて、八畳の明るい座敷の方から隣の小部屋の方には紫檀の本箱がつまっていて、艶よく光っていた。森閑としたなかでそうやって光っている本箱はやはりこわさを湛えていて、おじいさまの御本だよ、と云われても凝つと祖母の腰によりそつて遠くから見るだけだった。この祖父の写真が一枚あったが、白

髻で小柄なのに、子供の心にしたしめる表情は乏しかった。この向島からのかえりには浅草の仲店の絵草紙やで、一冊五銭ぐらいのお伽噺の本を買ってもらうのがきまりであった。大抵巖谷小波の本であった。祖父の蔵書は後でどこかに寄附されたが、あのぎつしり並んで光っていた本箱の行方については全く知らない。

やがて『少女世界』が私の本という新鮮な魅力をもつて一冊一冊とためられ、冬の縁側で日向ぼっこをしながらそれをあつちへ積みかえこつちへ積みかえしていた心持が思い出される。もつともこの時分には、もううちの本棚への木戸御免で、その又本棚とというのが考えれば途方もないものだった。居間のとなり長四畳があつてそこに父の大きいデスクが置いてある。背後が襖のない

棚になっていて、その上の方に『新小説』『文芸倶楽部』『女鑑』『女学雑誌』というような雑誌が新古とりまぜ一杯積み重ねてあって、他の一方には『八犬伝』『弓張月』『平家物語』などの帝国文庫本に浪六の小説、玄斎の小説などがのつていた。その棚の下どこかに鏡台がおいてあったのを思えばそこは主に母の本棚だったのだろうか。

女学校の二年ぐらいから、玄関わきの小部屋を自分の部屋にして、こわれかかったような本棚をさがし出して来て並べ、その本棚には『当世書生氣質』ののっている赤い表紙の厚い何かの合本や『水沫集』も長四畳のごたごたの中からもって来ておいた。

父方の祖母はずっと田舎暮しで、その家の本のあるところが、

実に夏休みの間の探險場所であつた。この祖母は、筆の先をなめて、あぶら一しよ、と書くひとであつたから、読む人のなくなつた本は薄暗い三畳の戸棚の中やしめ切つた客間の裏の板の間におしこんであつた。こつちの本には、いろいろな珍しい英語の本があつた。西洋の地獄の插画のついたのがあつたり、何か機械の図解のついたのがあつたり、詩集があつたりした。文学の本は少くて、政治や経済の明治初期の本があつた。父方の関心はそういうところにあつたと思える。西洋の地獄の插画のある本や詩集などは、省吾さんという叔父のもので、そのひとはホーリネスの信者で、支那やアメリカを旅行して日本へかえると間もなく死んだ。

女学校では、勉強の方法、本の使いかたというようなことをち

つとも教ええない。それ故本を活々とした人間の努力の集積、それを最善につかつて有益な結果をひき出す筈のものというような考えかたは、私としては随分後まで身につけなかった。

並べて見ているだけでよろこばしい亢奮を覚えるというような工合で、国民文庫刊行会で出版した泰西名著文庫をよみ、同じ第二回に分でジャン・クリストフなども読んだ。手のひらと眼玉がそれらの本に吸いつくという感じで、全心を傾倒した。

五十銭銀貨を何枚かもって、電車にのって神田へ本を買いにゆく。本を買いにゆく。それは全く感動に堪えない一つの行事であった。今でも本を買う特別な親愛の心はやはり微かな亢奮をふくんでいて独特な味である。

今十六七歳の少女は、どんな心持で本というものを見て感じているのだろうか。この間もある大きな新刊書を売る店で、その疑いをもった。セイラー服の少女が三四人で本を見ているのだが、その眼にも口元にも何の感興も動いていず、つよい好奇心のかけさえない。あの棚でちよつと一冊、この台でバラバラ、又あの台でバラバラ。そして流眇で本の題を見て小声で云つて見たりしている。百貨店であつちのショウ・ケース、こつちのショウ・ケースと次々のぞく。そのように見ている。

本への愛というようなことは、言葉に出してしまふと誇張された響をもつが、やはり人間の真面目な知慧への愛と尊敬、文化への良心とつながったものであると思う。若々しい知識欲が何か求

めて本気で本を見る眼差しは、ただ商品を視線で撫でてすぎるのとはちがう、おのずからなはた目の快さをも誘うのが自然だと思  
う。

本がどっさりあることは、不幸ではない。けれども、現代は本の数はあるが、本のなかみへの愛や探求心や尊敬が随分低められて来ている。文学の領域について云えば、作品の現実が、そこで扱われている感情のありようにしろ本質的には通俗で、読者にその作品の背後の作者の生活態度までを考えさせる力に乏しいため、何かバラバラとめくられて、一寸目についた文句で買われたり、広告で買われたりする傾向をつよめている。

女学校が、本の生きた読みかた、使いかたを教えないことは旧

態依然で、しかも個人個人として、本へのそういう薄情の培われる文化の傾きというものは、多くの考えさせるものを持っていると思う。

〔一九三九年十二月〕

# 青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第十七卷」新日本出版社

1981（昭和56）年3月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第4刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十五卷」河出書房

1953（昭和28）年1月発行

初出：「東京堂月報」

1939（昭和14）年12月号

入力：柴田卓治

校正：磐余彦

2003年9月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 祖父の書齋

宮本百合子

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>